

I はじめに

1 これからの音楽科教育を見つめて

Society5.0を生きる子どもたちは一生の半分をサイバー空間で過ごすともいわれている。AIの止まらない進化によってもたらされる社会構造の変化は、先が読めないことも多く、子どもたちはまさにVUCA時代を進んでいかななくてはならない。これからの時代に求められる新しいものに対応するスキルはもちろんだが、時代を越えてよりよく生きていくために必要な、人間としての強みを確かに育むことが教育現場の命題であるように感じている。小林、沼田（2020）は、音楽教育で養うことのできる「感性、論理的思考、自己表現力」は人間ならではの力であると述べている。音楽教育を通して名曲や名演奏に触れ「感性」を磨き、曲を表現するために思考し解釈を深めていく中で「論理的思考力」を鍛え、自分なりの演奏を披露する経験を通して「自己表現力」を養う。VUCA時代が示す変動が多く不確実、複雑で曖昧な世の中を力強く進むには、人間ならではの力や強みを高めていくことこそ、これからの未来を幸せに生きる力につながっていくと考える。



コロナ禍におけるマスクや自粛、ソーシャルディスタンスも最早日常となった。音楽科の学習は以前の姿を取り戻すことを考えるのではなく、ニューノーマルをスタンダードにすることを覚悟しなければならない。「歌唱」や「他者と協働しながら演奏」するなど、制限がかかる活動があっても、今までに囚われない授業づくりや工夫・改善に努める。しかし、音楽活動の先にある、音楽の楽しさや喜びは不変であることを実感できる授業づくりも肝に銘じて進めていきたい。

2 音楽科で目指す、『『自他』を往還し、批判的・創造的に学ぶ生徒』の姿

前次研究では複眼的な視点で思考を働かせることや、自分の学習の現在地を理解し次につなげるための振り返りの工夫などを重点として実践を行ってきた。題材同士の関連が生徒の中でうまく結び付き、鑑賞で見いだした見方・考え方を創作で生かしたり、創作で自身が行った工夫を他の楽曲から見つけたりして、自分の活動を様々な視点で考える意欲的な姿が成果として見られた。一方で、自身が音楽から知覚・感受することを思うように言葉にできなかつたり、自分の感性を信じ切れなかつたり、他者の意見に共感できないときも受け入れてしまったりする様子も見えた。学習成果に対する自信や自己肯定感を高めることにはまだ至っていない。今次研究の目標にある「批判的・創造的に学ぶ」姿に課題があることは明確である。

♪ 『『自他』の往還』について

音楽科では「自他」について、「自分と他者」と「自分の中での複眼的な思考」とで考えたい。前次研究では音や音楽について《作曲者》《演奏者》《鑑賞者》の視点から複眼的に音や音楽を思考することで、音楽のよさや美しさを追求できるように授業構成を工夫してきた。今次研究でも生徒が自分と他者の視点を柔軟に行き来し、学習課題のよりよい解決に向かえるように工夫を続ける。

♪「批判的・創造的に学ぶ」ことについて

音楽の学習活動は大きく【表現（歌唱・器楽・創作）】と【鑑賞】の二つに分けられている。創作の活動以外は、他者が作った音楽を演奏したり聴いたりすることがほとんどである。会ったことも話したこともない作曲家や演奏家と、楽譜や音とで向き合い、その曲に込められた思いや意味を解き明かしながら音楽に自分の考えを反映していく。作曲者はなぜそのような工夫をしたのか、自分の解釈は本当に正しいのか、などと「批判的に考える場面」と、批判的に捉え見つけ直した後、自由な発想を働かせながら納得解を導き出す「創造する場面」を授業の中に設定することで生徒の学びが深まるように支援する。

Ⅱ 音楽科における研究目標 2 の実現に向けた取組

研究目標 2：各教科・領域において、既習と未習、自己と他者の考えを意識的につなぎ合わせながら解決へ向かう授業のあり方を考え、実践する。

1 これまでの授業から

既習と未習について、生徒の様子を思い浮かべると、教師が「小学校でこんな特徴をもった曲、聴かなかった？」などと問うと「あ、あの曲と似ている！」と思い起こせていた。ただ、生徒たちの中で既習の音楽は、それぞれ「歌った曲」「聴いた曲」と捉えられていて、楽曲を通して学習した内容と楽曲との結び付きが弱いようである。また、生徒は学習活動の中で他者と関わり、様々な意見に触れることの価値をこれまでの経験から十分に知っている。だが、自己の授業を省察すると、授業計画の中で「このあたりで困るだろうから、交流を設けよう。」などと、生徒の姿を教師が予想して他者の考えとつなぎ合わせる機会を設定してしまっていた。既習と未習、自己と他者の考え、どちらのつなぎ合わせの場合も、生徒が「必要だと感じた」から出てきた手立てではなかったのが最大の反省である。

生徒の「必要感」から既習や未習、自己と他者の意見のつなぎ合わせが成されることこそが、「意識的な学習活動」と言えると思う。研究目標 2 の実現に向けて具体的な手立てを考える中で、奈須（2021）が述べている、子どもを信頼し学びに関わるより多くの決定を委ねるという「自己決定的学習」の項目に着想を得た。学ぶ内容は決まっても、学びの過程に自由に選択したり自分で決定したりする場面があるのは生徒にとって、とても魅力的で意欲を掻き立てられると考えた。しかし、委ねるにしても生徒が学習活動に自信をもてなければ自由は不安になってしまう。生徒が選択したり決定したりするとき、教師の働きかけで「この方法でやってみたい。」「これではうまくいかないから修正したほうがいいな。」と安心して方向を定めて進んでいける支援の方法を探っていきたい。

2 音楽科における研究目標 2 の実現に向けた授業実践の重点

音楽科では『より多くの決定を生徒に委ね、生徒が必要感をもって課題解決に向かえる授業づくり』を主たる取組として、3つの重点を設定した。

(1) 学習に向かう道筋を自分で考えるための支援の工夫

授業省察から、課題解決に向け教師が導いていた部分を生徒に委ねるために、生徒自身が「どうやって」課題解決にアプローチしたいか考えられる場面を要所に設定する。ただ委ねるのではなく、教師の問いかけや支援によって、生徒が「この方法でやってみたい。」を深めたり、「この方向で考えていっていいのかな。」に自信をもてたりできるような工夫の在り方を考えていく。

(2) 既習や他者の考えを自由に振り返り、使用できる工夫

ワークシートや音楽室の環境の工夫で、その時の学習課題に適する既習や他者の考えを自由に振り返ったり見比べたりできるようにしていく。自身の学習の現在地を確認し、批判的・創造的に見直しせる環境は教師の準備で提供し、自由にあるものを「いつ」「どんな風に」「使う（使わない）」のかは生徒に委ね、自分に必要なものは何かを見つめさせていきたい。

(3) 複眼的な思考を働かせるための授業構成の工夫

複眼的な思考は学習が行き詰ったときや、よりよく進めたいときに有効に働くと考えている。歌唱であれば、まずは思う存分《演奏者》として楽曲と向き合い、練習し歌えるようになるべきである。「歌えるようになった」以上のことを生徒が求めたくなくて初めて、自分が《鑑賞者》だったらこの演奏を聞いてどう思うだろうか、自分が《作曲者》だったらこの強弱はどうするだろうか、などと複眼的な思考を働かせることが学習の中で生きてくる。複眼的な思考からのアプローチが有効な場面を教師が見取り、生徒が思考を行き来させる自由がある授業構成を工夫していきたい。

Ⅲ 実践例

第1学年「箏曲『さくらさくら』の変奏の創作～作りたいイメージを音にしよう」

A 表現 (2) 器楽ア・ウ、(3) 創作イ・ウ

1 授業構成

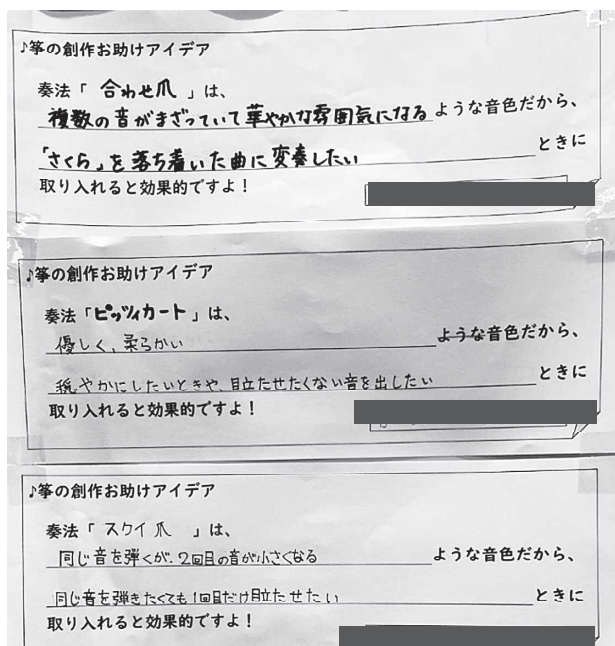
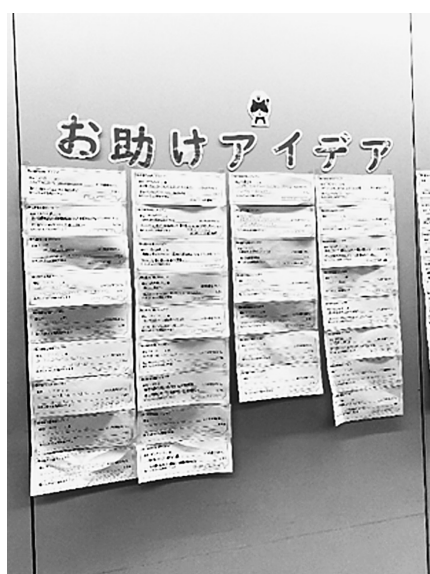
時	学習活動
1	箏の基本的な知識と弾き方について学習する
2	『さくらさくら』の基本的な奏法の練習する
3	箏の様々な奏法の学習とそれによる音色の変化を味わう
4・5	『さくらさくら』の変奏で、表現したいイメージをもち様々な奏法を取り入れて創作する
6	中間交流発表と、変奏の仕上げ
7	発表会

2 授業の実際

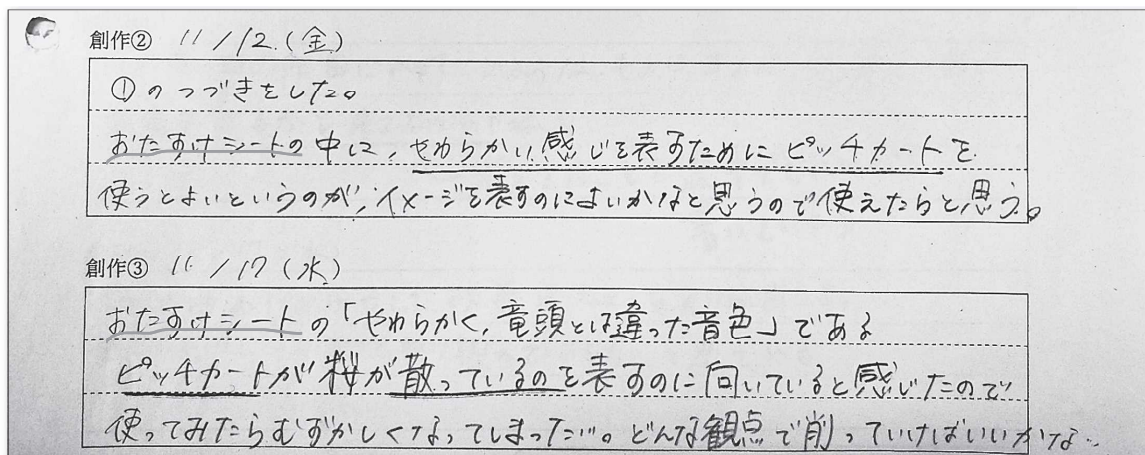
創作の導入で【『さくらさくら』の魅力的な変奏を創作するには、どのような工夫ができるだろうか】という学習課題を共有し、ここを重点(1)学習に向かう道筋を、自分で考えるための支援の工夫の一場面と考えた。教師はこの学習課題に対し、音楽を形づくっている要素の【旋律】を箏の奏法を使って【音色】の工夫や【リズム】の工夫ができることをねらいとしていた。学習課題を共有後、「この課題に向かってどうしていこうか?」と問いかけた。戸惑う様子もあったが徐々に声が上がり始め「変奏が何か分からない。」という訴えがあった。分からないに対しても「どうしていこうか?」と問いかけた。すると「例を聴かせてほしい。」という意見が聴こえたので、『きらきら星変奏曲』のテーマといくつかの変奏を簡単に紹介した。すると「きらきら星は聞こえるけど、なんかパワーアップした感じ。」「工夫がすごい。」「もとの曲を変えるってこと?」などの感想が出てきた。はっきりと「変奏とは何か」を説明するのは難しくても「じゃあいろいろな弾き方(奏法)で変えられるんじゃない?」など、既習とのつながりを感じ、徐々に学習の道筋を見いだしていく姿があった。他のクラスでは「変奏の意味を

まず教えてほしい。」という反応に教師が「旋律の高さやリズムを変えたり、装飾をつけたりして変化させること」だと答えた。「装飾って何？」というつぶやきに対して「タララララ～♪（グリッサンドの音まね）ってしたやつじゃない？」と、やはりだんだんと既習と結び付けだす様子があった。想定していない流れになることもあるが、生徒は自身の力で課題解決に向かう力を持っている。場面の流れを見取り、生徒が学習に向かう道筋を決めていく中でずれが生じる場合は修正したり調整したりできる即時的なフィードバックが教師の役割であると実感した。

上記のような交流の中で「奏法を取り入れることも変奏になる」と導かれ、必ず奏法を取り入れて変奏すると確認して創作に取り掛かった。奏法を試し弾きし、音色の変化やそこから感受できるイメージを吟味し、『さくらさくら』の原曲にどう取り入れたら自分がイメージする変奏になるかを試行錯誤しながら学習を進めた。重点の(2) 既習や他者の考えを自由に振り返り、使用できる工夫を意識し、ここではワークシートの工夫を行った。思考の整理のため、奏法を使うことによって得られる【音色】の変化や感受できることを書き留めるワークシートを用意したのと合わせて、他者に発信できるように単票の形のワークシートも準備した。個々で奏法による音色の変化を味わって奏で、自分が気付いたことを他者に向けて創作の手助けとなるように「お助けアイデア」として紹介できるようにした。紹介するためにはぼんやりと感じていた音色の変化を言葉でどう相手に伝えればいいのか、自分の心がどう受け止めているかをより深く見つめる必要があり、音色を味わい感じ取ろうと自己の中で思考を巡らせている様子が見受けられた。単票は完成後掲示しただけで、特に声掛けなどは行わなかった。



掲示すると、すぐに眺めに来る生徒、創作に行き詰ったとき掲示板に向かっていく生徒、掲示を見ることなく、黙々と創作に取り組む生徒など様々な姿が見られた。既習事項の整理と他者の意見を自分の学習に必要な情報であるかを判断し、必要だと感じたときに選んで使えるようにすることも委ねる方法の一つとなり、能動的な学びの姿を生み出す手助けになっていた。また、掲示を見てじっと考え込む生徒に声をかけると「自分と同じ奏法を選んでいるけど、真逆の感じ方をしている人がいて自信なくなった」と言ったり、〈図〉の振り返りシートの記述にあるように、他者の意見を参考にしても思ったように創作が進まなかったりしている生徒もいた。他者の意見を単純に受け入れるだけの活動に留まらなかったところは、批判的な思考を働かせる上でも有効であり、自分の意見も他人の意見も立ち止まって自己調整をするきっかけにもなっていた。



〈図：生徒の創作振り返りシート〉

この実践では重点の(3)複眼的な思考を働かせるための授業構成の工夫として、題材全体構成に中間交流を設定した。①「どのような思いや意図をもって魅力的な変奏にしようとしたか《作曲者》」を説明し、②「演奏《演奏者》」し、③「《鑑賞者》から感想」をもらうという流れで交流を行った。自己と他者の意見のつなぎ合わせだけでなく、3者の立場を行き来しながら自己と他者の作品を見つめ直した。同じ課題に向かい創作したからこそ他者の工夫の面白い発想に感心したり、演奏の技術について評価したりできていた。複眼的思考の働きから、さらに作品を磨く意欲を喚起することにもつながった。



IV 授業実践を通して見えてきたこと

より多くの決定を生徒に委ねながら、生徒が必要だと感じた手立てや方法を利用して学習課題の解決に向かう方法を模索した。特別な方法を考え出すのではなく、「今までしていたことの中で生徒の自由を奪っていたところがあったか」を見直せたことが成果だったと思う。始めは「必要感を感じさせるための工夫」を考えることに走ってしまっていたが、「自由な選択をする」という行動も生徒それぞれの必要感から表れる姿であると気が付いてからは、自身のこれまでの授業に自由な選択を取り入れる余白が多くあることに気が付いた。研究1年次で教師の授業省察にしかたどり着いておらず、生徒の変容を記せるほどの実践を重ねられていない。今後も成果と課題を見つめて研究を続けていきたい。

V 引用文献・参考文献

〔引用文献〕

- ・小林洋子、沼田峰紀（2021）『これからの時代を生きるすべての子どもたちへ 音楽教育のススメ』幻冬舎、2-3
- ・奈須正裕（2021）『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社、175-186

〔参考文献〕

- ・大内孝夫（2021）『AI時代最強の子育て戦略「ピアノ習ってます」は武器になる』音楽之友社
- ・北海道教育大学附属札幌中学校（2021）『研究紀要第67集』
- ・柳沼良太（2020）『学びと生き方を統合するSociety5.0の教育』図書文化